

技術と倫理、その時間性

——ハンス・ヨナスとハンナ・アーレント——

木村 史人

古代ギリシャの時代から、我々は技術をもって自然と相対してきた。だが、現代を生きる我々の持つ技術は、その力において、近代以前の人類のそれとは比較しえないほど強大である。原子爆弾の有する暴力は地球を破滅させるに足り、遺伝子改良の技術は、将来生まれてくる人間や生命の姿や能力を変貌させるかもしれない。我々の持つ技術の力が増大したことにより、その技術の力が及ぶ範囲は、空間的・時間的に拡張された。この技術の力の増大によって、従来の倫理学では対象とされなかったような問題が生じる。すなわち、もしも現在の我々の技術の使用が将来の世代の存続を脅かすとするならば、現在の我々はそれを防ぐために何をすべきであるのか、というハンス・ヨナスが『責任という原理』(1979)において提起した問題である。

ヨナスの未来倫理は、現在を共に生きる者同士の直接的、相互的な関係を扱う、従来の倫理学(たとえばカント倫理学)が想定しなかった状況を問題とする。未来倫理においては、現在の我々と、現在存在しておらず、将来存在するかもしれない者との、もはや直接的、相互的とはいえない関係が、倫理の問題となる。このような未来倫理の根拠付けが従来の倫理学とは異なった困難を孕んでいるのは、両者の関係が相互的ではなく一方的なためである。現在における強盗や殺人に対しては、被害者は抵抗することで自らの権利を守ることができるが、未来の世代に対する強盗や殺人においては、被害者は未だ存在していない以上、抵抗は原理的になされえない。また、技術の累積的な使用によって将来の破局を予期できたとしても、「現在の我々がその破局を回避すべく行動するべきである」という当為は即座に導かれぬ。「たとえ将来において破局が訪れるとしても、現在の享樂のためにその技術を使用し続ける」ことを我々が選択することは可能であり、そして実際にしばしばその選択がなされている(CO₂の排出削減に関する各国の足並みの揃わなさが例としてあげられるだろう)。「現在の我々が将来の破局を回避すべく行動するべきだ」という当為は、現在の不自由(不利益)と比較し、将来へと人類が存続することに価値を認められてはじめて有意義な主張となる。

ヨナスが『責任という原理』において苦心した「存在と当為の間の裂け目 *Kluft*」に橋渡しをする試みは、現在存在しているものはそれ自体で将来へと存続する価値がある、ということ証する試みであるといえる。ヨナスは「自然は目的を有しているので、価値を有している」と述べ、存在しているものが目的を有していることから、それ自体で価値を有するものであること、すなわち善きものであり、存在すべきもの、将来へと存続すべきもので

あると主張する。

しかし、このようなヨナスの議論は、果たして十分な妥当性を有すると言えるのだろうか。本発表において論者は、このヨナスの『責任という原理』における「存在と当為の間の裂け目」への橋渡しを時間性という観点から検討し、橋渡しがただ目的という未来的なものによってのみなされただけでは不十分であることを示したい。このような意図でなされるヨナスとの対決のために、彼とも縁の深い哲学者、ハンナ・アーレントを召喚する。

アーレントが区別する「労働 labor」、「制作 work」、「活動 action」という三種類の行為は、それぞれに特有の時間的構造を持つ。特に重要であると考えられるのは、アーレントが、この世界に生まれてくるという出来事としての「出生 natality」は、「想起」と「感謝」によって反復されると考え、目的に導かれてなされる「制作」とは区別された「活動」の時間性を、無数の自由な始まりの反復と考える点である。このようなアーレントの「活動」における「想起」と「感謝」は、ヨナスの倫理学においては十分に強調されているとはいえない、既在的なもの、歴史への関わり的重要性を明らかにする。我々はかつて誕生したからこそ、現在新たに自由に始めること、新たな目的を設定し、それを志向することができるとは思えないだろうか。そうであるとするならば、ヨナスのいう「存在と当為の間の裂け目」は、アーレントの「想起」や「感謝」というような既在的なもの、歴史への関わりという視座を補完的に併せることによって始めて十分に橋渡しされることになるだろう。またこのようにアーレントにおける「出生」、「誕生」を併せて考察することによって、ヨナスが「あらゆる責任の原型」、「責任の萌芽」として、乳飲み子に内在すると指摘する存在当為(存在すべし)をも、歴史という視座から捉え直すことができるように思われる。